「四国防災八十八話」を読んで

肱東中学校　一年　中塚美奈
長岡留奈
矢野珠璃亜

私たちは、この「四国防災八十八話」という本の中の数ある話の中から、私たちの地元でもある大洲市の「水よけ場」の話を読みました。なぜ、この話にしたかと言うと、私は総合的な学習で洪水のことを調べていて、この「水よけ場」についても調べたからです。

この話によると、大洲盆地は、洪水が原因で大きな被害をよく受けていたそうです。だから、住む人たちはいろいろな工夫をしていたそうです。例を挙げると、家を二階建てにしたりしていました。また、床を地面より七十から八十センチメートルも高くし、壁には腰板を張って保護し、一階は板張りの間として重要な家具は二階に置いた家が多かったそうです。他にも、大洲水に備えて、若宮の上組・中組・下組の地域ごとに二箇所ずつ神社

や寺院・庄屋などの屋敷全体を高くして、高石垣を築き、水をよける場所としていたそうです。これが、「水よけ場」と言われるものです。今でも「水よけ場」は多く残っています。私も実際に水よけ場を見たことがあります。本では、「まさしく、水害に備えた究極の危機管理対策そのものであり、暮らしを守るために生まれた人々の知恵です。」と書いてありました。

私は、この話を読んで、昔の人たちはいろいろな知恵を使って、洪水から身を守るようにしていて、すごいなあと思いました。昔の人たちがこのような工夫をしていたからこそ、今の自分たちがあるような気がします。

肱川の洪水だけではありませんが、水害は全国で発生しており、避けることは大変難しいのだと思います。けれど、少しでも被害を減らせるように、知恵を出し合い、被害をなくしていくことが大切だと思います。この本を読んで学んだことを、少しでもこれからの

生活に生かしていきたいです。